Opera, "True Love of Komachi" (in 3 Acts/Japanese)
Music and Libretto by Hideaki Hirai　Original by Jun'ichi Saga

オペラ『小町百年の恋』（全３幕）作曲・台本：平井秀明

原作：佐賀　純一（「筑波山愛ものがたり」）

■作品解説:

「第２３回国民文化祭・いばらき 2008」委嘱で誕生した当作品は、2008 年 11 月つくば市のノバホールにおける世界初演で大成功を収め、早くも 2009 年 11 月には牛久市および、東京公演が実施された。2010 年 3 月、文化庁後援による本格舞台規模での水戸再演の際には、台本、音楽面での改訂も施され、初演時はホール機構上の制約により１管編成であったオーケストラを通常２管編成に拡大し、さらに第２幕終盤の「火祭りの踊り」では、ダンサーを 10 名に増やして視覚的にもスケールアップを図り、"グランドオペラ"としての完成に至った。

2011 年 3 月には、東日本大震災で一旦は中止となった公演が、地元関係者らの熱意により、同年 8 月に復興支援チャリティ公演として復活し、2012 年 8 月には"常陸国風土記編纂 1300 年記念"として土浦公演が開催され好評を博し、2014 年 8 月に次いで、2015 年 8 月土浦再演、さらに 2017 年東京再演（渋谷）、2018 年で土浦市都和にて 10 回目の上演を迎え、急速に人気オペラとしての地位を確立しつつある。万葉集、古今和歌集などから約 20 首もの和歌を取り入れ、西洋のオペラ芸術と融合したことは、東西の伝統文化や芸術をさらに深化させる画期的な試みとしても、特筆に値する。

【第１幕】

「序曲」（第２・３幕の地獄での運命や愛の勝利の予兆として、閻魔大王のアリア「これぞ地獄の掟なり」、「夢の歌」（小町のアリア）の主題が現れ、さらに「夢の歌」＆「花の色は」（アリアと二重唱）の各主題が同時に重なり奏される仕掛けもある）、**混声合唱「筑波山」**（「平和」の象徴として、第 1･3 幕終結部でも再現）、子供たちが元気よく歌う**児童合唱「みんなで遊ぼう」**と**茨城県のわらべ歌**３曲（土浦公演では１曲のみ演奏）、古老と児童の掛け合いが微笑ましい長大な**レチタティーヴォ「松生と松実」**（少年少女の愛の絆、茨城県命名の由来の物語；土浦公演では大幅な短縮版）、およしの**アリア「筑波嶺（つくばね）を仰ぎて」**（筑波山を題材にした、平井秀明作短歌２首）、高貴な歌人・高橋虫麻呂の訪問を村人が祝う**混声合唱「歓迎の歌」**（茨城弁："酒を呑んべ"や、しゃっくり："ひっく"などのユニークな表現も含み、賑やかな宴の様子を描写）、愛する家族との離別を悲しむ**混声合唱「防人の歌」**、虫麻呂とおよしの恋の芽生えを暗示する**二重唱「嬥歌の夜（かがいのよ）」**、百人一首でも有名な陽成院短歌による**アリア「男女川（みなのがは）」**など、序盤から聴き応えある楽曲により、ストーリーを流れるように展開する。

第１幕終盤は、お松・お竹・お梅の短い**アリア３曲**の各主題が、続く美しい**三重唱「我（あ）が恋を」**の中間部で三声に重なる高度な仕掛けがあり、2010 年水戸公演の際にこれらの 4 曲を一連の一曲構成に改訂された。続く、**四重唱「防人の歌」**では、防人に旅立った夫と離れ苦しむ三人の妻たちと、虫麻呂の心情が、和歌４首を基に、重厚なフーガで巧みに描かれる。当初、虫麻呂と女声合唱のみであった**フィナーレ「夢か幻か」**も、およしを再登場させることで、力強い二重唱で第１幕を終えるべく再編された。

【第２幕】

防人絡みの第１幕の重苦しい雰囲気とは対照的に、華麗で明るく楽しい場面転換が第２幕前半の特徴である。コミカルな侍女三人による丁々発止の茨城弁が聴き所の**メロドラマ「侍女の井戸端会議」**や早口言葉の**三重唱「素敵なお方」**、小町に恋焦がれる殿方どもの**男声合唱「小町は何処」**、小野小町とその恋仲にもあった小野貞樹夫々の短歌による仙人の重厚な**アリア「今はとて」**、後半は地獄の場面へと様相を変え、**レチタティーヴォと二重唱「閻魔庁の使者」**（虫麻呂と阿鼻の決闘シーン）、迫力漲る閻魔大王の長大な**アリア「これぞ地獄の掟なり」**、踊り子の妖艶なダンスが見せ場の**フィナーレ「火祭りの踊り」**は、比較的穏やかな第１・３幕を両翼に配し、筑波山的シンメトリーの頂点ともなっている。

【第３幕】
神秘的な夜から深草少将登場による愛の予感へと移行する**管弦楽曲「第３幕への前奏曲」**、**アリア「夢の歌」～小野小町の歌＜夢の三部作＞**（恋する人との夢の逢瀬に焦がれる小町が詠んだ３首）、**二重唱「花の色は」**（アリア風の小町独唱、次いで小町作「色みえで」および深草少将が大伴家持作「夢の逢いは」で加わり、情熱的な二重唱に発展）、愛のテーマ“まことの愛は”による愛の**二重唱「夢の逢瀬で」**、**フィナーレ「小町の眠る里」**（混声合唱「筑波山」の主題が再現され、最後は、混声合唱「筑波山」・小町アリア「夢の歌」・虫麻呂アリア「男女川」の各主題が三つ巴になるハミングコーラスを経て、男女が抱き合うが如き筑波山（男体山・女体山）の山容と、小町と深草少将の寄り添う姿が重なり、大団円を迎える。

■あらすじ:

＜第1幕＞
今は昔、８世紀ごろの常陸の国。筑波山麓のある村で、男女が肩を寄せ合うような、筑波山の美しい姿を村人たちが賛美し、子どもたちはわらべ歌で楽しく遊び**（児童合唱「みんなで遊ぼう」、「坊さん坊さん」）**平和に暮らしている**（混声合唱「筑波山」）**。万葉の歌人、高橋虫麻呂は、帝の命により「常陸国風土記（ひたちのくにのふどき）」編纂のため、各地で和歌を収集する旅の途中、畑を耕す美しい人妻・およしを見かけ、一目惚れをする。村人たちは高貴な客人を祝宴でもてなすが**（混声合唱「歓迎の歌」）**、お目当てのおよしの姿は見当たらず、虫麻呂は恋心を一首の和歌にしたため、屋敷へと帰る。突然、平和な村に国府の役人が訪れ、防人に命じられた男たちは、愛する妻や恋人たちと別れ、一斉に旅立って行く**（混声合唱「旅立ち」）**。およしのことが忘れられぬ虫麻呂の夢枕に仙人が立ち、男女の出会いの場でもある嬥歌（かがい）という風習が、次の満月の夜に行なわれることを告げる。虫麻呂は慌ておよしのもとへと向かい、その晩筑波山頂で会う約束を交わし**（二重唱「嬥歌（かがい）の夜」）**、虫麻呂はおよしへの募る想いを和歌**（アリア「男女川」）**にしたためる。

ところが、およしは一向に現れず、夜の闇を一心不乱に登る、百歳を超えた老婆たちに遭遇する。月明かりに照らされた三人の老婆たちが、たちまち若く美しい娘に変身し、虫麻呂は仰天する。やがて、和歌を詠みながら互いを慰めあう女たちは姿をくらまし**（四重唱「防人の歌」）**、遥か山麓の村からは筑波山を賛美する村人やおよしの歌声が響き、夢か幻かわからず、およしへの想いだけが募る虫麻呂は、独り筑波山の頂に佇み、不思議な一夜が明けてゆく。

＜第2幕＞
常陸の国の屋敷へ戻った高橋虫麻呂は、不気味な男・阿鼻が連れ歩く、およしに瓜二つの美女に遭遇する。絶世の美女到来の噂は瞬く間に広がり、侍女たちは小町の美貌にあやかりたいと浮足立ち**（メロドラマ「侍女の井戸端会議」、三重唱「素敵なお方」）**、村の男たちは小町を一目見たいと屋敷の傍に群がってくる**（男声合唱「小町は何処」）**。虫麻呂の夢枕に仙人が再び現れ、その女こそ絶世の美女・小野小町であると告げ、小町の魔性に取り憑かれた男たちは皆、黄泉（よみ）の国へと導かれ、閻魔大王の惨い裁きを受ける運命を予言する**（レチタティーヴォ「小町伝説」）**。地獄の使者として再び現れた阿鼻に、虫麻呂は閻魔庁へと強引に連れて行かれ、かつて小町に惚れた深草少将の百夜通い（ももよがよい）伝説を耳にする。小町の屋敷へ百日通い続ければ、その想いに応えるという小町の言葉を信じ、九十九日目に無念の死を遂げた深草少将の怨念が、次第に虫麻呂に乗り移る。いよいよ閻魔大王の裁きが始まり**（アリア「これぞ地獄の掟なり」）**、鬼たちの火祭りや生贄の踊りも披露され、地獄の宴が盛りを迎える**（フィナーレ「火祭りの踊り」）**。

＜第3幕＞

夢の世界。神々しい光が漏れる屋敷の中では、小町が己の成就せぬ恋多き人生を憂い、夢の中でしか恋する人に会えない辛い定めを嘆き、その悲しみを夢の歌三首に託す**（アリア「夢の歌」～小野小町の歌＜夢の三部作＞～）**。

・いとせめて恋しき時はむば玉の　夜の衣を返してぞ着る　古今集　小野小町

（あなたが恋しくてどうしようもない時、夜の衣を裏返して着るのです、あなたの夢をみようと）

注）夜の衣を裏返して着て寝ると、恋い慕う人が夢に現れるとの俗信（迷信）に基づいている。

・思ひつつ寝（ぬ）ればや人の見えつらむ　夢と知りせばさめざらましを　古今集　小野小町

（あなたを思いながら寝たので夢に見たのでしょう。夢と知っていたら覚めずにいたものを）

・うたたねに恋しき人を見てしより　夢てふものは頼みそめてき　古今集　小野小町

（うたた寝をしていたら恋しいあなたの面影を見ました。それからというもの儚い夢をも頼もしく思うようになったのですよ）

深草少将の怨念が乗り移った虫麻呂が、牛車から降りて屋敷に近づき、小町への募る想いを伝えようとしても、一向に言葉が出て来ない。その姿を見た小町は、自らの美貌の衰えの故かと問い、時の移ろいの無情さを憂い、己の人生を花の色に託して和歌を一首詠む**（二重唱「花の色は」）**。

・花の色はうつりにけりないたづらに　わが身世にふるながめせしまに　古今集　小野小町

（花の色が春の長雨に褪せるように、時の流れに、私の美しさも失せてしまったことだ）

・色見えでうつろふものは世の中の　人の心の花にぞありける　古今集　小野小町

（色などないのに、色あせて行くものとは何だろう、それが心のという名の花なのだなあ）

・夢（いめ）の逢ひは苦しかりけり驚きて　掻き探れども手にも触れねば　万葉集　大伴家持（おおとものやかもち）

（夢で逢うのは苦しいものです。はっと目覚めて探っても手にも触れないので）

注：夢（いめ＝寝目）は、歌唱上の便宜や聴衆理解を考慮して、作曲者が「ゆめ」に変更。

突然、地獄の使者・阿鼻が現れ、言葉が出ずに困惑する少将を地獄へと連れ戻そうとするが、今宵は少将が小町の屋敷に通い続けて百日目であると悟った小町は、ついに少将の愛を受け入れる決心を伝え、小町は長い歳月待ちわびた百年の恋が叶うことを喜ぶ。寄り添う二人は永遠の愛を誓い、強まる愛の力で、地獄の魔力に立ち向かい、苦しみもがく阿鼻は地獄へと堕ちる**（四重唱「百夜通いの真実」）**。小町と少将は愛の勝利を喜び、共に常陸の国で暮らすことを誓う**（二重唱「夢の逢瀬で」）**。寄り添う二人の姿と、筑波山（男体山・女体山）のシルエットが重なり合い、山の麓からは筑波山を賛美する村人たちの歌声が聞こえてくる**（フィナーレ「小町の眠る里」）**。《時空を超越した夢物語》であったかのように、静かに幕が下りる。